

仮面のミシェル・フーコー

田 中 寛 一

I

まだ無名の時代にいたトーマス・マンが、格別の用があって立ち戻ったわけではない生地リュベックの一流ホテルにあって、その宿泊者カードの職業欄に「作家」と書き込んだことから、手配中の詐欺師ではないかとの嫌疑を掛けられ、危うく逮捕されそうになったという事実も、そして実生活上のマンの興味深い逸話が、珠玉の短編小説『トニオ・クレーゲル』に重要な着想を与えたという事実も、比較的良好に知られた事柄であろう。デンマークへの旅立ちを遮られたクレーゲル（＝マン）が、改めて職業を尋ねる警察官に対して、確固とした口調で「作家」であると繰り返したのは、たとえ発表した作品数はいまだに乏しく、決して大勢の読者がいるわけでもなく、したがってほとんど無名に近い状態にあるとしても、少年時代から早々と受け取っていた、呪いとしての文学という額の刻印とか、記述に対して感じている恵与の才分の明証とか、あるいは著述に自己の全身を捧げる代償として授与される高貴といったものからして、自分が「作家」以外の何者でもありえないことを、根底から認識していたからに違いない。つまり、自らを「作家」たりとするこの自意識は、実際に出版された著書の数とか、未知の読者からの手紙の量とか、世間的な知名度の高さといった、「著者」であることの社会的な立場に起因するのではなく、若い頃からの詩作への傾倒とか、著述に対する適性の自覚とか、自己放棄による記述への絶対的な没入といった、自己と著述との個人的な関係において成立するものなのであろう。

一般に無名作家というものは、通例は羞恥心と警戒心から、自ら「作家」であると名乗ることを意識的に避ける傾向にあり、クレーゲル（＝マン）もよく自覚していたように、われわれの公民道徳からすれば、名の知れた職業作家でもないのに、自分の職業欄に「作家」と記入するような

胡散臭い人物が、詐欺師よばわりされるのは、ある意味では当然のことである。しかし、意識的にはすでに「著作家」でありえても、現象的にはいまだ「著者」ではないという、通常の職業作家の生成手順そのものからして、まさにその人物は本質的に詐欺師ではありえない。たとえ不幸にして無名のままに息絶えようとも、その無名作家は信頼しうる誰かに原稿を託することによって、「著者」としての死後の名声を頼むのが常なのであるから。こうした意味からすれば、旅券も身分証も携帯していなかったクレゲル（＝マン）が、その土地のかつての名誉領事の子息であることは黙秘したまま、偶然に鞆の中に入れていた校正刷りによってようやく身元証明を行い、ともかく詐欺師である嫌疑を晴らすのは、このうえなく象徴的であり、暗示的でさえあると言えよう。すなわち、近い将来において「著者」となる人物である。

ところが往年のトーマス・マンとは対照的に、「著作家」たる刻印も認識もなく、したがって「著者」たらんとする意志も希望もなく、ただ「教師」としてのみ自己を規定していたにもかかわらず、ある日目覚めてみれば突然に世界的な「著者」に祭り上げられていたミシェル・フーコーにとっては、自らを「著作家」とするこの自意識ほど、最初から最後まで決定的に欠如し、あくまで遠く無縁であり続けるものはなかった。『言葉と物』の不可思議な成功から数えても、主著だけを取り上げて優に片手に届く著書を発表し、自著を解説するように促す数多くの対談に応じ、その名声を他者のために利する書評と序文に署名することを通して、社会的な立場としての「著者」の役割は、進んで引き受けていたかに見えるフーコーではあるが、自己と著述との個人的な関係においては、たとえば「まず言っておきたいのは、私が著作家に適していると感じたことなど決してないということです。私は書くことが私の仕事であるなどとは考えていませんし、ペンを取ることが——私にとって、私が話しているのは私にとってだけです——他のすべてを圧倒する一種の絶対的な活動であるなどとは思っていません」¹⁾というように、青年時代からの志望を否認し、著述に対する適性を否定し、記述に対する全身的な自己投入を拒否

1) Michel Foucault, «Du pouvoir.», *L'Express*, n° 1722, 1984, p.56.

することによって、すべての点においてこの「著作家」意識から逃れ出ていたものであり、「著作家」であることをあくまでも拒んでいたのである。

「著作家」意識というものはおそらく、「著者」たる現象に先行していることを条件としてのみ発生し、「著者」となってから遡及的にはもはや所有しえぬものなのであろう。「私が死ぬ時は、一枚の原稿だって残しませんよ」²⁾。結果的にはすでに「著者」ではあっても、心情的には永遠に「著作家」たりえないという、この逆説が指示しているのは、「著者」としてのフーコーが仮面・虚像・写真にすぎないという事実ではないであろうか。われわれの公民道徳からするなら、フーコーこそは本物の詐欺師であり、道化師であり、香具師であったに違いないのである。「私はひとが自ら著作家と名乗りうることに衝撃を覚えます。私は道具売り、銭集め、地図書き…」³⁾。

こうした視点においてようやく、著名人としてのフーコーにあって特徴的な、われわれの眼を捉えて離さないひとつの奇妙な身振りについて語ることが可能となろう。すなわち、失われた過去の無名性を取り戻そうとする所作、それが叶わぬとすればせめて、一般の匿名性の中に紛れ込もうとする動作である。ミシェル・フーコーにおけるこの「無名願望」ないしは「匿名志向」と名付けうるものを検討することをもって、本論の任務とするものである。

II

『言葉と物』以降の、著名人としてのフーコーの活動は、およそ「教師」「著者」「知識人」の各領域に大別され、それぞれの活動の反響がその栄誉をなおさら揺るぎないものにしていくのであるが、フーコーの「無名願望」あるいは「匿名志向」と名付けうる傾向は、これらの各領域において、容

2) Jean-Pierre Barou, «Il aurait pu aussi bien m'arriver tout autre chose.», *Libération*, 26 juin 1984, p.4.

3) Foucault, «Sur la sellette.», *Les Nouvelles Littéraires*, n° 2477, p.3.

易に検証しうる事象である。例えば、「今日私がしなければならない講義の中に、またおそらく何年にも渡ってここでしなければならないはずの講義の中に、できれば私は見咎められることなく忍び入りたかった。私は言葉を発するよりはむしろ、それによって覆い隠され、ありうるすべての始まりの向こう側にしっかりと運ばれていたかった。話をする時には、名前のないひとつの声が、ずっと以前から私の声に先立って続いていることを、私は認めたかったのです」⁴⁾という、コレージュ・ド・フランスの就任記念講演『言説の秩序』の冒頭部は、公開講座という万人に開放された場所における、「教師」としての匿名性への切なる要請であろうし、また「一人ならずの者が、きっと私みたいに、もはや顔を持たないために書いています。私が誰であるのかは尋ねないで下さい。私に同じままの者であるようには言わないで下さい。そんなことは戸籍上の道德で、これは私たちの身分証を支配しています。書くことに関する時、この道德は私たちを自由にするべきです」⁵⁾という『知の考古学』の序論部の有名な章句は、「著者」としての無名性への虚飾なき憧憬の告白であろう。さらには、クロード・モーリャックが『そして希望はいかに激しいか』などの日記において伝えるさまざまな証言、たとえば「私たちは次の駅レオミュール・セバストボルまで、地下鉄に乗る。そこで、私はこの雑踏の中では彼が匿名であることに気付く。(…)最初にレオミュール・セバストボルに来た時、彼はキングズ・コワフェールという理髪店のチラシを配っていた青年と皮肉な言葉の遣り取りをしたことがあった。『私にはこれは要らないのですよ』。彼らは二人とも笑ったのだった。(…)私たちが決めていたこととは反対に、ミシェルと他の連中と私も、行動に参加してビラ配りをする...(…)警察の干渉なし。レオミュール・セバストボルの交差点で交通整理をしている警官も、私たちに何の注意も払わない。APLの遠慮がちなカメラマンに、フーコーが言う。『だめですよ。私たちはいないことに

4) Foucault, *L'ordre du discours*, Gallimard, 1971, p.7.

5) Foucault, *L'archéologie du savoir*, Gallimard, 1969, p. 26.

なっている』⁶⁾というように、警察の介入を恐れながらも、無名の人間でありえていることに本当に嬉々とするかのように、街頭を行く通行人たちに「囚人行動委員会」のビラを配る様子などは、そのままが匿名の「知識人」としての顕現に他なるまい。

『言葉と物』以後、フーコーには最上級の形容による多種多様な評価が与えられ、その著作の各々に煽動的な呼称が浴びせられた。たとえばそれは、最良のフランス語の散文を残した作家家であるとか、誰よりも広範な博識を備えた哲学者であるとか、あるいはまた比類なき慧眼を見せた歴史家であるとかする一般的な評価であり、「人間の殺害者」「構造主義の主宰者」に始まり、遡及的には「精神医学の反逆者」「新批評の旗手」、発展的には「ポスト構造主義の先導者」「権力秩序の素乱者」「性神話の破壊者」といった個別的な呼称である。こうした評価と呼称が、フーコーを著名なスターの座に伸し上げ、その名声を確固たるものにした最大の要因として機能しえたことは明白な事実であり、それらを通してフーコーは世界中の読者にとって、フランス現代思想の強力な牽引者となり、欧米および日本の思想界を席卷した知的英雄となり、今世紀最大の国際的な大知識人ともなったのである。しかしながら他方では、この同じ最上級の評価と煽動的な呼称が、本来のフーコーとは別人のような括弧付きの「フーコー」を捏造し、その読者との素朴な交流を不能にした、最大の原因として作用したことも、また否定し難い事実なのである。世界的な思想家と余人は目したにせよ、フーコーにしてみれば、ただの大学教師に過ぎず、現代の「神話破壊者」とマスコミは持て囃したにせよ、「傲慢な歴史家」に他ならず、指導的な知識人としての役割は確かに果たしたにせよ、デモや集会の一参加者でしかなかったのであって、「私は作家でも、哲学者でも、大知識人でもありません。私は教師なのです。ある社会現象があって随分と私を煩わせています。つまり1960年代以降、一部の教師たちは同一の義務を負っ

6) Claude Mauriac, *Et comme l'espérance est violente*, Grasset, 1976, p. 456-8. C'est Mauriac lui-même qui souligne.

た公人になりつつあるのです。私は予言者ではありたくないし、言いたくありません。『座り給え。私が言わなければならないことはとても重要なのだ』なんてね⁷⁾という、謙虚というよりもあくまで軽快な自己認識からすれば、どのような評価も呼称も、したがってどのような栄誉も名声も、現実のフーコーにとっては無用の、むしろその本意の実現を妨げるばかりの障害でしかなかったことは想像に難くない。

また一方では、フーコーのなした仕事の多くが、社会によって排除され、歴史によって抹殺された無名の人びとの声を、われわれに聞き取らせることに費やされたことは、すでに周知のとおりである。正常者に対する異常者を、社会人に対する犯罪者を、健康人に対する疾病者を、大人に対する子供を、異性愛者に対する同性愛者を、白人に対する非白人をして語らしめること、それは、精神病院の暗い回廊で、監獄の冷たい壁面で、病院の白い寝台で、学校の建物の陰で、曖昧宿の一室で、移民労働者の群れ集う路地で、人知れず口にされ、泡のように消え去って行く、聞き取りにくく記録しがたい言葉に、脚光を浴びせんとするフーコーの、強い意志による重要な営為であったはずである。「著者」としては、『狂気の歴史』や『監獄の誕生』はもとより、十九世紀のノルマンディーの田舎町で、母と妹と弟を惨殺した殺人者を、その手記によって「著者」として復権させた『ビエール・リヴィエールの犯罪』や、些細な家庭内の混乱を收拾すべく、ひとりの人物の監禁を命ずる国王の封印状を要請する、家族の一員からの請願書を編集することによって、「汚名に塗れた人びとの生活」に陽光を当てた『家庭の混乱』などは、実際にそうした人びとをして直接に語らしめた好例と言えよう。また「知識人」としての活動で言うなら、フーコーらの設立した「監獄情報集団」はもとより、関係のあった各種の団体および運動、すなわち囚人のための、移民労働者のための、同性愛者のための、

7) Foucault, "Truth, Power, Self.", *Technologies of the self*, edited by Luther H. Martin et al. The University of Massachusetts Press, 1988, p. 9.

ポート・ピープルのための、そして体制の東西を問わず、抑圧を受ける人びとのための、列挙に限りのないこうした諸活動ないし諸闘争もまた、フォーコー自身が語るのではなく、彼らをして直接に語らしめることが、その流儀であり目的であったはずである。「私がテレビで発言する時は、私自身の表現行為の代理とか代役としてではなく、視聴者にとって有益かもしれないのに、知られていないあることのためです」⁸⁾。それは、自らの名声を利用しつつ観客の視線を集めておいてから、通常は発言権を持たない無名の人びとを舞台の前面に押し出し、照明に照らされてようやく聞き届けられることになる彼らの言葉を確かめながら、自分は闇の中に消え去って行くことを潔しとする、フォーコーに固有の身振りである。そして「教師」の仕事とは、教育とはまさにこの身振りそのもの、すなわち自らは無となることによって、奈落の底にいて出番を待っている教え子たちを華やかな舞台に送り出すことではなかったのか。『ピエール・リヴィエールの犯罪』はまた、コレッジにおける講義とはまた別の、演習の共同作業の所産であり、荘重さの中に自身を押し込めなければならない講義よりも、より活気に満ちた思索と仕事の方向性を打ち出してくれる、共に研究する少人数の演習を好んだ「教師」フォーコーの、参加者全員の着実な成果を眼を細めて見つめる、密かな喜びの著作でもあったのである。

III

だがそれだけに尽きない。フォーコーには実際に匿名であることを条件に引き受けた対談「仮面の哲学者」⁹⁾さえあって、そこではたとえば「私たちが匿名を行使するよう、なぜ私があなたに示唆したかですか。まったくの無名であり、私の言うことがわずかばかりの好運に恵まれて聞き届けら

8) Foucault, «Du pouvoir.», p. 62.

9) «Le philosophe masqué.», *Le Monde*, 6 avril 1980, p. 21-30.

Voir: «Cet auteur anonyme, c'était Michel Foucault.»

(Thomas Ferinczi, «Eloge de l'annonymat.», *Le Monde*, 15 juillet 1984, p. 11.)

れていた時代への郷愁からです。蓋然的な読者との接触面は無傷のままでした。著書の効果が意外な場所に跳ね返り、私の思いもしなかった輪郭を描き出してくれていました。名前とはひとつの便宜なのです」¹⁰⁾と、無名時代への郷愁を語っており、ここでも同じ身振りを確認することはできよう。だが、著作において自らの無名願望を表明することと、対談という形式にせよ実際に匿名の著作を公表することとは、本来まったく別次元の問題であろう。前者が、あくまでその著作内部に留まる、「著者」あるいはそれらしき「私」による、個人的な願望の告白にすぎないのに対して、後者はといえば、著作の生産と消費とを支配する日常的な出版制度における「著者」による意図的なひとつの社会的行為だからである。それは対談にすぎず少なくとも著書ではないという理由によって、他に波及する恐れはあまりなく、「著者」—「出版者」—「読者」という著作の流通制度に対し、さしたる影響は与えはしないものの、書籍・雑誌・新聞・テレビ・ラジオといった現代のマス・メディアにおいて、著者名を明記することという、われわれが当然のこととして受け止め、疑うことさえ知らない安逸な状況に対する、その規則あるいは慣習に明白に違反した、侵犯的かつテロリズム的な行動なのである。だとするなら、その照準を明らかにしなければならぬ。その規則または慣習の自明性を疑ってみなければならないのである。果たしてわれわれはなぜ著者名を必要としているのだろうか。

フーコーは「著者とは何か」（および『言説の秩序』）において、マラルメ以降のフランスの文学と哲学にあって、「語る主体」の消滅後も依然として残っている「著者」というものの概念を、社会的または文化的な「機能」として捉え、その特徴を四項目にわたって分析しており、それがそのまま著者名の必然性の分析でもあるので、以下それに依拠しつつ、著者名の必要性の諸点を確認した上で、この「仮面の哲学者」の照準を検討することとしたい。その第一点は、いうまでもなく所有権の所在の特定化

10) *Ibid.*, *Entretiens avec Le Monde*, La Découverte/Le Monde, 1984, p.22.

である。「著者」とは何よりも法律上の著作権の保有者であり、法規によって保護される権利の受益者である。匿名の著作は、それが作者不詳であるかぎり、法律上の保護の対象とはなりえない。だがこの必然性は同時に、著作に係わる責任の所在の明確化でもある。今日なお公共の良俗に対する素乱および根拠なき名誉棄損は、刑事および民事上の訴追の対象であることから容易に理解しうるように、著者名はかつて国家および教会に対して、その著作に見られる危険性と侵犯性により、処罰の対象として当局の追求を受ける際に必要とされたことから、その重要性を増加させてきたのである。したがって従来より匿名の著作が、政治と性の領域において頻繁に見受けられた理由が了解されよう。政治制度を批判する反体制的な著作と、性の禁忌を破る猥褻なその責任者は、常に処罰の対象でありえ、そこから逃れる必要があったからである。ポルノグラフィにおける匿名性を含む、著者の社会的な名誉の保護という問題は、おそらくこうした事情の裏返しにすぎまい。

第二点として著者名は、広義の文学に属する場合に特に強く要求される。中世においては真理の保証者として著者の名前が強く要求されていた科学的な著作が、今日では比較的に無名性のもとに受容される傾向にあるのに対して、かつては無名のままで流布し、伝承されていた文学的な著作は、今日では著者の名前を戴かずして受け入れられることはもはや不可能であり、「偶発的な出来事あるいは著者の明白な意志の結果、それが匿名でわれわれに伝わって来ることがあれば、ゲームはたちまち著者を見つけだすこととなる」¹¹⁾という指摘のとおり、「仮面の哲学者」がフーコーであると不明のままであれば、われわれはそれが誰であるのか知ろうと努め、その仮面を無理やり剥がしたい衝動に駆られるはずである。

著者名の必然性の第三点は、同一人物によって記述されたいくつかの著作の統括者としての必要性である。読者が一個の作品を読んだとして、こ

11) Foucault, «Qu'est-ce qu'un auteur?», *Bulletin de la Société française de Philosophie*, n° 64, p. 85.

の著者には他にどんな作品があり、これとそれらとはいかなる関係にあるのか、すべてに共通するものは何か、そして変化したものはいかなるものを、読者は知ろうとする。個人全集が文学的な著者に限られているのはこのためにちがいない。われわれは著者に、その諸著作の統一性についての、それらの隠された意味についての、その個人的な生活についての、そしてその生活と著作の関係についての、説明を要求して止まないのである。しかしながら諸著作の統括者としての「著者」とは、普段われわれが享受しているように、自動的かつ自発的に与えられる集約点ではなく、著作に基づいてその著作から著者を特定しようとする際に必要な、一連の複雑な操作の結果に他ならない。パスカル著として19世紀に発見された『愛の情念に関する説述』の著者が、パスカルではないとした証明手続きを想起してみても、もっと身近でこの「仮面の哲学者」がフーコーであることを実際に証明しようとするときでさえ、われわれは他の著作との比較検討によって、文体の均一性、水準の同一性、内容の連続性、事件の一定性を証明しなければならないが、そうした複雑な操作はあくまでも心理的な印象というものにすぎないのである。

必要性の第四点は、ひとつの著作に登場する多種多様な「私」の総括者として想定される「著者」である。主人公の「私」、虚構上の語り手の「私」、そして著者らしく思える人物の「私」と、さまざまな「私」が可能ではあるが、しかし著作におけるいずれの「私」も、著者個人に直接かつ無条件に帰着するものはひとつもなく、それらの「私」の総括者としての「著者」などどこにも存在してはいないのである。文学に限らず、「機能としての著者を担ったすべての言説がこの複数の我を含んでいる」¹²⁾ であって、フーコーのこの指摘を頼りとして、かつて『知の考古学』に登場する四種類の「私」について論じたことがある¹³⁾ように、たとえば先に引用した無名願望を表明する「私」は、架空の対話者である「あなた」との照応

12) *Ibid.*, p. 88.

13) 『仏語・仏文学』第14号所収。

関係においてのみ成立しており、フーコーの分身のひとつではあっても、直接フーコーという個人に帰着するものではない。ましてやこの「仮面の哲学者」にあって、「私が匿名を選んだのは、だから誰彼を批判するためではありません。そんなことは決してしていない。それは蓋然的な読者に対して、もっと直接的に私を差し出すひとつの方法で、私に関係する唯一の人物がここにいるとすれば、『僕が誰なのか君は知らないのだから、君が読んでいることを僕が言う理由を詮索するなんていう誘惑に駆られてはいけない。ただ単に思わず独言を吐いてくれればいい。本当だ。間違ってる。これは気に入る。これは気に入らない。それだけだ』というわけです」¹⁴⁾というように、匿名の理由を説明し直しもする「私」(あるいは「僕」)は、「著者」の意志によって梯子を外された「私」でしかなく、誰でもない誰かということになる。

こうした点において「仮面の哲学者」の照準とするところが明らかとなろう。それは無論、反政府的でも猥褻でもないし、誰かを誹謗中傷するものでもありえない。著作権まで放棄したのかどうかまでは知る由もないが、所有権とか責任の所在としての「著者」の必要性を目標としているのではないことだけは明らかであろう。だからといって、読者にとってはその「仮面の哲学者」が誰であるのか、一読すれば直ちに判明する程度の秘密でしかない以上、フーコーが「著者」探索ゲームをわれわれに提供してくれているわけでもないのである。「私はひとつゲームを提案します。『無署名年間』というそれです。一年間、著者名なしの著書を刊行するのです。批評家たちは完全に匿名の作品を相手に仕事をして退けなければなりません。でも私が思うに、たぶん彼らには何も言うことがないでしょう。すべての著者は、翌年を待ってその著書を公刊するでしょうね」¹⁵⁾とあるように、提案されてるゲームはもっと積極的であり、無駄とは知りつつも自らの行為を敷衍させ、一般化させようとする意志まで表明しているのである。同

14) *Op.cit.*, *Entretiens avec Le Monde*, p. 24.

15) *Ibid.*, p. 22.

様にこの対談はさまざまに可能な「私」の総括者としての「著者」の必然性を攻撃したものであるまい。そんな人物はどこにもいないし、「著者」がさまざまの「私」に分裂し、そのどれもが「著者」の分身であるとして、そうした事態は著作活動における言語の特性である似上、嘆いてみても始まらないからである。「仮面の哲学者」が照準としているのは明らかに第三の「著者」、すなわち同一人物の書いた著作の統括者としての「著者」への参照の拒否なのである。集約点としての著者への帰属を不可能にすることによって、著者個人の生活との関連を、他の著作との比較を、著作間の共通性の搜索を、そして「著者」の変容の解明を拒絶しようとしているのである。

この時、「仮面の哲学者」が匿名のもとで読むように要請しているのが、この対談そのものではなく、賭けられているのはそれ以外の他の著作すべて、とりわけ『知への意志』における予告とはまったく異なった形式と内容のもとで、当時から記述されようとしていた『性の歴史』の続刊、『快楽の活用』と『自己への配慮』（および未刊の『肉体の告白』）であること、そしてこれまでの著作とこれらとの連続性、つまりは自己同一性を拒否し、その違言に対する非難をかわそうとしていることがわかる。したがってフーコーが確かに引き受けていたかに見える「著者」の役割が、止むを得ずの仮面であったこと、そして「仮面の哲学者」における「無名願望」とか「匿名志向」とか名付けうるものが、「著者」という自らの仮面を剥ぐという所作によってではなく、その仮面の上にさらにもう一枚の仮面を付けることによって、より確実に正体を隠そうとする身振りであることがわかるのである。

こうしたフーコーの身振りを理論的に支えているのは、この機能としての「著者」すら不要な社会、「著者」なき文化への展望である。「生起した歴史的な変容を見ても、機能としての著者が、その形式、その複雑性、そしてその存在においてさえ、一定のままであることは不可欠でないし、それどころではない。機能としての著者が決して出現することなく、言説が受け取られる文化を想像することができる。すべての言説は、その地位、

その形式、その価値のいかんを問わず、そしてそれらになされる処置のいかんを問わず、匿名の囁きの中を繰り出して行くことだろう」¹⁶⁾あるいは「ひとつの解決策があるでしょう。制定されるのを見てみたいと私の思う、出版に関する唯一の法律、著書に関する唯一の法律とは、各著書がそのものとして読まれるべく、著者名を二回にわたって使用することを禁止し、さらに匿名と偽名で発表する権利を認めたものです。著者についての知識が理解の鍵となる著書があります。しかしわずかに偉大な著者を除けば、他の大部分の著者にとっては、この知識はまったく何の役にも立ちません。ただ遮蔽幕になるだけなのです。私のように偉大な著者でなく、ただ著書を捏造しているだけの者にとって、そうした著書は、欠点と蓋然的な長所を含んだ著書そのものとして読まれるのが望ましいのです」¹⁷⁾。

IV

歴史上のひとりの人物の生成と消滅についての単一的な記述に他ならない伝記のうちにあっても、政治家とか科学者とか芸術家のそれが、通常は伝記文学として書かれまた読まれるのに対して、「著者」の伝記だけは、その著作をより深く理解するための研究の一環として書かれ、また読まれるという点で個別的に異質である。冒頭に挙げたマンのように、ある「著作家」が現実体験した私生活上の些細な出来事を契機として、ひとつの実り豊かな作品の構想が生まれ、やがて傑出した著作として世に送り出されるという事態が、文学史上において歴然として存在する以上、その「著者」の伝記的な研究があってはじめて、作品の研究が成立するという場合が実際にあるというのがその理由であろう。だがわれわれはこの事態を根拠と口実として、サント＝ブーヴ以来のことなのだろうか、すべての「著者」についてもおしなべて、登場人物の生活をではなく、「著作家」のそ

16) Foucault, «Qu'est-ce qu'un auteur?», p. 95.

17) Foucault, «Une esthétique de l'existence.», *Le Monde*, 15 juillet 1984, p. 11.

れを語ることによって、作品が理解するという幻想を抱いてはいないだろうか。ミシェル・フーコーのそれは、研究書ではなく、伝記文学ないしはルポルタージュなのである。

著述活動こそがすべてであり、実生活上の事件を著作において再現し、その事件を著書という永遠性において風化することのない不動の結晶としようとするトーマス・マンとは正逆に、著作活動というものが、過去の問題にけりをつけ、その虜となっていた自己からの離脱を試み、それまでとは違った思考方法を発見しようとするための手段にすぎないミシェル・フーコーであってみれば、その著書とは自分自身のパロディ・諧謔・虚構でしかありえず、著書の中にフーコーは不在であることになる。だからこそフーコーは、「いずれにせよ、私の個人的な生活は少しも面白いものではありません。もし誰かが私の著作は私の生活のあれこれの部分への参照なくして理解できないと思うのなら、その問題を考えてみてもいいです。(笑い) 私が同意すれば回答する用意はできている。私の個人生活が面白くもないものである限り、それを秘密にしておいてもしかたありません。(笑い) 同じ理由で、それを公表してもしかたないのです」¹⁸⁾と言ったきりで、自らの個人的な生活についてはほとんど何も語らなかったであろう。要するに、『狂気の歴史』『臨床医学の誕生』『監獄の誕生』そして『性の歴史』のどこを探しても、狂気に陥った、外科医の父親に反抗した伶俐な息子、「監獄情報集団」の闘士、同性愛者であることに苦悩したフーコーはいはいしないのである。ミシェル・フーコーはその著作とはもっと別のところで生きて死んだのだ。仮面を剥がそうなどと考えてはなるまい。

(本学非常勤講師)

18) Foucault, "An interview by Stephen Riggins.", *Ethos*, No. 2, 1983, p. 9.